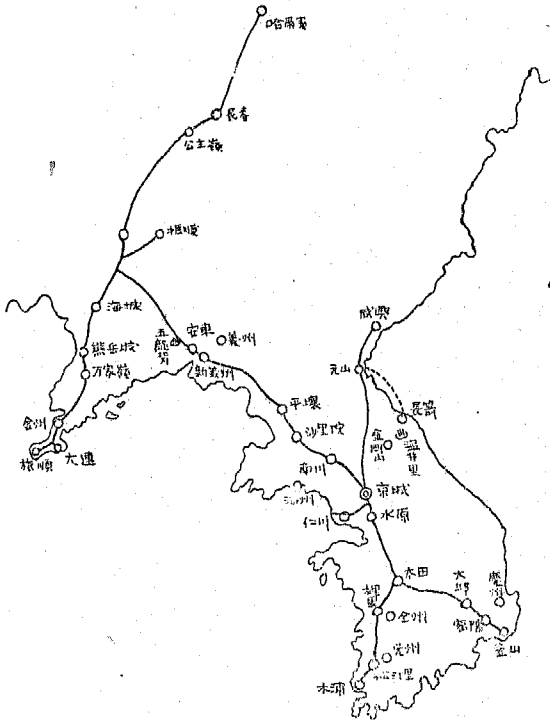


講演

朝鮮滿州旅行談

針塚校長



△ △

針塚校長には本年八月三十一日上田を出發翌月三日釜山に上陸 それから三十餘日朝鮮滿州の各地に亘つて視察を遂げ十月四日大連を出帆同十日無事歸校せられました。本記事は十月十五日日本校職員學生の爲になされた講演の大体とその後先生が編者のためにして下さつた談話によつて作成したものであります。こゝに掲げた略圖の地名は先生の訪ねられた主なる都市名所であります。

▽ ▽

朝鮮と言へば内地の人は氣候の不順な非常に寒い極めて住み難い處の様想像して居るが決してそれ程ではない。勿論處によつては可成寒さの酷しい處もあるけれど朝鮮從來の家屋の構造がオンドルに依る耐寒式に出來て居り、尙滿州及これに接近せる地方はロシア

から持ち來たされたペーチカに依つて冬期室内の溫度を適度に高く保つ事が出来るのとスケートその他冬の運動が發達して居るのとで朝鮮滿州の冬の生活は案内に愉快なものである。

尙養蠶と雨との關係が面白く出來て居る。即ち春蠶期中は殆んど降雨なく上簇後約一ヶ月の雨期續きこの間に桑は盛に繁茂し八月初めから霽れて秋蠶晩秋蠶の時期はよく乾燥して飼育極めて容易なのである。然して春秋晩秋の三期の飼育を爲すものが普通である。

朝鮮民家の蠶室はその構造極めて簡單で自分の住家の土間の一部分に放養するもの。又は極く粗末な堀立小屋を作り土間に棚を立て内地の如く蠶箔で飼育するものもある。蠶室は勿論住宅まで自作で木材は松ポプラ等の丸太を用ひ周圍の大部分は壁を以て被ふのであるが一般に土質が壁に適して居るので至極便利である。そしてこの簡易蠶室の工費は坪當り十圓乃至二十圓で足りるのである。

朝鮮で最初に見たのは密陽である。こゝでは高橋君(蠶一)が農蠶學校に居られて丁寧に案内せられた。氏は校内の蠶に關する一切を統べ更に附近の實業家と折衝して指導の上に目覺ましい成績を擧げて居る。特に朝鮮語に堪能な爲總督府から月々特別賞を受けて居る有様である。頭の輝きは益々進歩して恰も朝鮮の山林の如くである

密陽の附近は沖積土の理想的な砂質壤土で無肥料でも桑は勿論蔬菜にも適し特に桐の發育は内地に比べて著しく勝り本年九年目といふに皆直徑一尺一二寸といふ太り方である。

朝鮮全土に亘つて禿げ山の多いのはこれを形成する母岩の花崗岩が大形の長石の結晶を含んで居ると冬期の寒氣が甚だしいので風化が盛なる爲めに崩壊し易きが上に、尙ほ降雨少なく關係的濕度(Relative moisture)が小なるとで草木の生育が悪い爲である。従つて内地と同じ様な手入では當然禿げ山となるのを免れないのである

全羅南道の光州一圓は桑と蠶とに最も適しこゝでは養蠶組合が組織されて小さな絹絲會社の如きものがあつて乾繭場、倉庫の設備がある。

從來各道で桑樹の栽植を殆んど強制的に奨励して來て居るが此の州では昨年六百万本を植附けた。次第に養蠶業の有利な事が理解されて現在では自發的に好んで桑を植付けるやうになり。従つて繭の産額も大正四年には一万三千石であつたのが十三年には二十三万石といふ非常な増加を示すに至つた。

本道和順郡には朴君(蠶一)勸業課長として農蠶業指導に功績を擧げてゐる。氏の努力と手腕と公明無私の人格は一般の尊敬を受けつゝあるので前途大に見込ありと見たのに早くも道廳所在地光州部の勸業課長に榮轉した。近く飛報によると來年度は農司候補として知事から推薦せられた由である。

光州の道廳の技手金君(蠶七)は快活に活動して居る。將來良技術者となるは疑ない處である。慎重に事に當られん事を望む。

藤崎君(蠶七)は蠶の主腦地たる光州の原蠶の主任者として着々健實な手腕を揮つて居る。今後この方面の重鎮となることは明かである。

金州の原蠶には清水君(蠶一)が主任として榮轉して來られた。由來金州は柘の多い地でこれを以て三眠蠶を飼育し、その繭から採つた絲は漁網として特別に強靱であると言はれて居る。これは單にその纖維の細い爲であるとなされて居るが、品種及飼料から生絲に化學的成分の差異を來す爲であるかも知れない。清水君は必ず普通の蠶の試験の外に餘力をこの方面の研究に致すことであらう。

塚田君(蠶三)は北澤君の去つたあと獨り普州に踏み止つて最も將來あるこの地に腕を揮つて居る。

又製絲の方面では大邱を中心に朝鮮生絲片倉傘組の三會社があり皆約四百釜位で創立以來今日まで四五年間は經營上多大の犠牲を拂つた様子ですが今後は經營方針も立派に立ちて前途多望である。傘製絲に居る權君(絲十)が朝鮮語の巧なのと氏の眞面目の態度とで非常に重寶がられて居る。

從來朝鮮では原料の不足と工女の募集難からその經營が甚だ困難であつた。この地の女子はこれまで家庭外の勞働の習慣のなかつたのと製絲工場の性質が諒解されなかつたのとで一人の工女を備ふに五十圓以上も要し尙これを養成して一人前の工女に仕上げても極く短期間で工場を去る者が多い有様であつた。然し近頃は次第に諒解されて左程の困難は無い様になつた。

尙京城には百釜の京城製絲があつて伊藤君(絲四)が専らその經營に當つて居る。當工場は經營法の不良と時期の不遇との爲六萬圓の缺損ありて道廳もその處分に困つて居たが氏が四月赴任以來奮闘の結果既にその欠損を埋め合はせたるには監督官廳も眼を見張り居る有様である。好漢益々自重せられん事を望む。此外に朝鮮人のみにて經營せる朝鮮製絲會社あり。最近には京城に鐘紡が一万三千坪の敷地に三百釜の工場を建設しつゝある。

桑は内地の品種は悉く存在し特に魯桑系多く寧ろ之れに偏し過ぎた傾がある。次で多いものは島ノ内、十文字、市平、赤木等である。在來種では錦桑、唐桑、秋雨等の良種がある。

大邱原蠶には矢澤君(蠶一)代表的に止まり原蠶の中心人物としてその頭腦の明晰と手腕は頭角を現はし閩の如何を問はず尊敬の的となつて居る。氏は朝鮮野桑數十種を比較栽培してその中から錦桑を選出した。これは病蟲害に對する抵抗力の大なのと收葉量の多いのとで卓越した品種である。尙氏は一化性の夏期飼に成巧して盛に研

究を續けつゝある外無毒の蠶種を連年配布しつゝあるのは大いに氏の誇とする所である。又大邱の農學校には後藤君(蠶九)養蠶の主腦として青英の任に當つて居る。氏の考案に成れる桑のダイヤモンド式垣根を以て農場の周圍を繞したのは誠に見事な思ひ付きである。

平壤には貞包君(蠶六)農事試験場と並でる原蠶の主任者として腕を揮つて居る。殊に同氏の桑の實生から良種を撰擇せる方法は全鮮を通じての大規模にして有望なものである。此實生桑園のみにても數町歩といふ廣大なものである。

成興の原蠶では桑の耐寒性の試験を可成大規模に行ひつゝある此處にて撰出せるものにはチャムツル、サンピー、ペアリー、ケーツル等で寒さに對しては頗る強健なれども蠶は餘り喜んで食はない欠點がある。

咸鏡南道は將來朝鮮の農蠶業地として甚だ有望な所である。近頃北清の農學校に居合君(蠶六)を迎へたのは非常に喜ばしい次第である。氏はこの方面では同窓生としては第一線に立つて鮮人の蠶業教育に全力を盡して居る。

京城には同窓生六名多士濟々の有様で前に述べた伊藤君の外北澤君(蠶二)は晋州から轉じてこの原蠶の主任となり旁總督府の梅谷技師と聯合して蠶の雌雄の根本研究に従事して居る。勅使川原君(蠶八)は梅谷氏の許に在つて例の如く着々眞面目にやつて居る。小湊君(蠶五)は製絲科出身にも關らず化學に興味を持ち京城醫專の助教として化學の教授に當つて居る。氏は大楓子といふ植物から一種の癩病特効の薬を發見し他の藥學士をして啞然たらしめ近くはニンニクから一種のエキスを採り消毒薬として極めて有効な事を發表し大いに醫界に貢献して居る。然し決して本業の方も忘れず梅谷氏の依頼により蠶の蛹より蛾に至る體質の化學的成分の變化を研究中

である。從來活動の標本と言はれた小笠原君(蠶二)は農業學校に於て益々活動性を發揮して縦横の手腕を揮つて居る。福田君(蠶七)も近頃此所に来り最も實質的に農蠶業教育の内部の改善に努め元氣益旺盛である。

海州の原蠶には磯部君(蠶二)主任者として優良な成績を擧げて居る。氏の術はない真面目な態度を持久的に努力せば數年ならずして黃海道の蠶業の發展は疑ひない所である。

同窓生中の異彩は幾田君(蠶二)である。背水の陣を敷いて渡鮮後苦心の農場は一朝にして大水害の浸す所となり全く天涯の孤浪人となりたれども氏の鞏固なる決心は少しも動せず瞬く間に再興して今や畑七町、水田二町の大地主となつた。農場經營の旁附近の鮮人に農蠶業の技術を授けて日鮮合同の先驅となつて居る。愈氏の自愛を望む。

朝鮮の蠶の品種は内地の如く小石丸。又昔等であつたが近頃は日一×支四の様な雜種が盛に飼育されるやうになつた。

この地の耕耘は巧に二頭の馬又は牛を使ひ殊に滿州では大農組織が發達して居る。また驢馬を使用する點は内地に於ても山の多い地ではこれを見習つたら極めて有利であらう。

木浦には東洋一の棉の試験場があつて全世界の棉の種類を集めて居る。その試験地二十町歩もある。その他殊に果物の生産多く黃桃は有名なものである。

朝鮮に於ける繭の生産費を見るに内地では十貫目につき六十五圓から八十圓なのにこゝでは二十五圓から三十圓である。關東州に於ても四十五圓から五十二圓位である。この主なる原因は勞力の廉い結果である。即ち女子は食料持參一日十五錢から二十五錢男子は四十錢前後である。その上蠶室が廉價に出來。桑園は肥料が極めて僅

かで足りる爲である。尙氣候乾燥な爲飼育容易故蠶種の製造は甚だ有望である。

滿州の柞蠶業は新義州、海城、熊岳城を結ぶ三角形の中に於て行はれ松樹及万家嶺は最も盛で万家嶺には滿鐵の柞蠶試験場がある。柞蠶は丘の上の檜の木に飼ふものと川の沿岸の蒿柳(キヌヤナギ)で飼ふものとあつて蒿柳は飼料として檜に勝ること數等である。現在の産額は全滿州で八十億粒であるが近々百億粒に達する見込である然しながら例の二十一ヶ條の中の商租の問題が今尙解決されない爲に本邦人の滿州に於ける農業に一手も染める事の出来ないのは甚だ遺憾な次第である。

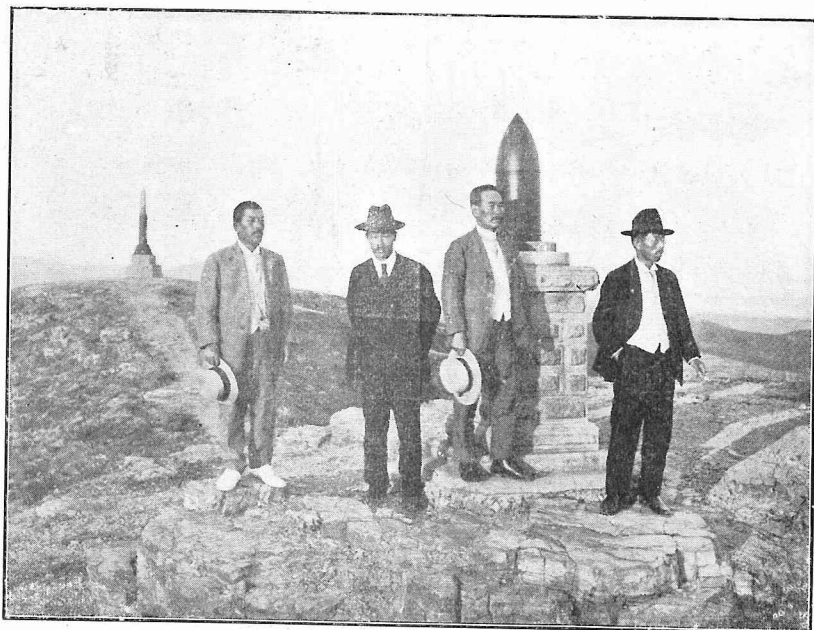
安東縣には富士紡の柞蠶紡績會社があつて富士紡の最大の財源をなして居る。その柞蠶製絲は漸く50%の絲を得るに過ぎない。故に此製絲の事業は未だ改善すべき點が非常に多い事であらうと思はれる。此の安東紡績工場には最近後藤君(絲一)が赴任された。宜しく自重を望む。

尙安東縣の興東公司には佐藤君(蠶三)が時々往復して内地に於ける滿州柞蠶絲の配給の衝に當つて居る。今や氏は堂々たる貿易商の態度で盛んに活動してゐる。

滿州に於ける同窓生の代表は湯川君(蠶一)である。滿鐵經營の熊岳城農事試験場の蠶業部主任として劃策縦横目覺しい手腕を發揮しつつある。滿州の蠶絲業の方針は一つに氏の胸中にありといふ事が出来る。氏曰く『滿州程いゝ所はない永久に内地に歸る心はない』と。これを見ても滿州が如何に蠶絲業に有望な土地であるかを知る事が出来やう。

九月末金州農學校に黒木君(蠶七)赴任氏は少くも十數年は腰を落ちつけて關東州の農蠶業教育に死力を致す決心であると語つた。

朝鮮滿州に於ける同窓生の動靜の大体は上に述べた中に含まれて居るが諸氏は皆學校を代表して第一線に立つて奮闘努力して居るのである。此の後進同窓生の爲に献身的行爲を發揮して居られるのに對して我等は感謝せねばならない。



上は二〇三高地に於ける記念撮影
 右から高橋俊氏（旅順蠶業試験場囑託）
 針塚校長 湯川君 樋口三郎氏（旅順蠶業試験場囑託）
 下は平壤原蠶種製造所の根刈桑園